

那覇市立壺屋焼物博物館蔵「門上秀叡・千恵子コレクション 厨子 (No.4)」の作者名押印について

倉成 多郎

Signature on the Burial Urn "Zushi(No.4)Kadokami Collection" in the Naha Municipal Tsuboya Pottery Museum

Taro KURANARI

17世紀の初頭、琉球王国の窯業生産に起こった大きな変化については、鹿児島県苗代川の堂平窯出土資料との比較検討により近年明確になりつつある。

1616年、3名の朝鮮人陶工が薩摩藩苗代川から来琉し、堂平窯系技術を主体とする窯業技術の指導を行うことによって琉球王国における登り窯を利用した本格的な窯業生産が始まった。朝鮮人陶工たちが居住し、また在来の瓦工たちに技術導入を行った湧田窯（現那覇市）では、輪積み技法による成型後、無釉ないし泥釉・原始的な黒釉を施された壺・甕などの貯蔵を目的とした中・大型製品を主体とする生産体制が確立された。以上の認識が2016年に開催された那覇市立壺屋焼物博物館企画展「一六一六年 琉球陶始四〇〇年」において提示されたが、強い異議は研究者から提示されなかった¹。

しかし、1616年以後の琉球王国での窯業生産がどのように推移したかについては依然として未解明の部分が多く、諸技術の導入時期や導入主体の解明、さらに考古学的編年も十分に行われているとはいいがたい。特に18世紀は施釉陶器の成立、連房式登り窯の導入など窯業技術に大きな革新があったことが予想されるが研究は十分に進んでいない。

本稿では平成25年に那覇市立壺屋焼物博物館が新たに収蔵した「門上秀叡・千恵子コレクション」の中から1727年に製作された「厨子 (No.4)」を取り上げる。本資料は作者名の押印がある極めてまれな作例であるが、個人の功績によっては